

子どもの貧困・機会の格差是正を考える

—人間の安全保障(ヒューマン・セキュリティ)の観点から—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：安倍内閣が子どもの貧困・機会の格差是正を最重要政策の一つにしたそうですね。

A：(林明夫。以下略)遅きに失したとも言われていますが、今からでも遅くないので、どの政権でも最重要施策にして頂きたいと強く希望します。

Q：林さんの考えをお聞かせください。

A：(1)私は、子どもの貧困・機会の格差是正は「人間の保障」、つまり、一人ひとりの人間の安全保障という観点から考えるべきとずっと思っていました。

(2)「人間の安全保障(英語で言うと Human Security ヒューマン・セキュリティ)」の考えは「国家の安全保障」を補うものとして国連の基本方針になっているものです。日本国政府は外交政策、とりわけ、政府開発援助(ODA)の中心的な概念として強力に推し進めているものです。

(3)私は、国連が「人間の安全保障」の考えを押し出した 1995 年ごろからこの考え方に共感し、2000 年から活動をスタートした、私が会長をつとめる「開倫ユネスコ協会」では「人間の安全保障の推進」を設立の基本理念としています。

(4)「人間の安全保障」の中心となる考えは、「保護(Protect プロテクト)」と「能力強化(empowerment エンパワーメント)」です。

Q：人間の安全保障における保護と能力強化とは何ですか。

A：(1)生命の危険のある紛争などで難民となったり、自然災害に遭遇した場合には、まずは「保護」し、生命を維持することが急務となります。とりえず病院や難民キャンプ、避難所などで生存を確保し、過ごすことが大事です。

(2)次に、生活の立て直しのための定住地での住居や生活の手段としての仕事、学校の確保が求められます。新たな環境の下で住み、仕事を、学校に通うためには、その土地での生活ができるだけの語学の習得や職業訓練が求められます。これが「能力強化」です。

(3)私は、この「人間の安全保障」の考え方を子どもの貧困・機会の格差是正に役立てたらと考えます。

Q：子どもの貧困・機会の格差是正に、「人間の安全保障」の考えをどのように役立てるのですか。

A：(1)障害をもつ子ども、DV(ドメスティック・バイオレンス)やネグレクト(育児放棄)など

に遭遇している子どもには、「保護」という考えの下で、行政が積極的に介入したり、関係する NPO の支援を行政と民間が積極的に行うべきです。

(2) 学校等に通っている子どもで朝と夕方の食事が不足している子どもには、昼の学校給食の他に、「朝の給食」「夜の給食」「休日の給食」を「公的資金」で用意すべきです。冷凍や解凍の技術が発達していますので、最先端の調理技術と学校ボランティア等を活用すれば、あまり予算を用いずに「子どもの食糧問題」を解決できるのではないかと考えます。

Q：貧困が原因で進学のコ機合が奪われるという問題にはどう対処したらよいですか。

A：(1) 学習塾や予備校に行けないことが教育格差の原因であるならば、全国に五万箇所ある学習塾や予備校に 1～2 各ずつの受験生の無料受け入れを訴え、お願いすべきと思います。各学習塾や各予備校の自主性に委ねるというのも一つの考えですが、本気で取り組むのであれば、政府や自治体がこの要請を正式にすべきです。

(2) これと同時に、学校でも校長や副校長、学年主任などのあまり授業をもたない先生や、場合によっては学校事務職員や学校に勤務する職員のすべてが協力して、授業前や放課後に無料の補習塾や進学塾を行うべきです。学校ボランティアの活用も有用です。

(3) 目の前に貧困が原因で進学するだけの学力が身に着いていない児童・生徒がいたら、一人たりとも放置しないことが、教育者には求められるからです。

Q：英語やコンピュータはどうしたらよいのですか。

A：(1) 15 年後の 2030 年の社会では、英語とパソコンの知識・スキルなしで生活できるだけの収入が得られる仕事に就ける可能性が高いとは思えません。

(2) そこで、学校の各学年で教育されるレベルの英語とパソコンだけは、何が何でも確実に身に着けなければなりません。

(3) また、英語の先生は、児童・生徒が学校の授業に出席し、定期テストなどを受けるだけで 4 技能が確実に身に着く教授法を身に着ける必要があります。自分の英語の授業についていけない児童・生徒には、授業時間外に補習をすることが求められます。

(4) なぜ、日本人は英語が身に着かないのか。その理由の一つは、日本の中学 2 年生以上は、「英語のテキストの音読」をほとんどしないからです。ですから、学年に関係なく、一度習ったテキストの音読練習を高校 3 年生までさせるべきです。英語の試験にも、音読の試験を入れるべきです。

(5) 学年が進めば進むほど英語の書き取り練習をする能力を欠くのも、日本の中学や高校、もっと言えば、大学の英語教育の最大の欠点です。書き取り練習をせずして、英語を「書く能力」など期待できません。高校 3 年生の授業でも書き取り練習をすること、英語の試験には必ず「書き取り(ディクテーション)」を入れること、当然です。

(6) 日本人の留学生ほど英語の読解力に欠ける学生はいないと言われています。この理由は、日本の中学や高校、大学では英語の本を 1 冊も読ませず卒業させるところが大半であるからです。英語の本を 1 冊も読まずに高校や大学に進学させてはなりません。大学も卒業させてはなりません。英語の新聞、本や雑誌を毎日読んでではじめて英語が身に着きます。

(7)日本中の英語の先生には、貧困と教育の機会格差是正のために、読書や新聞を含む本格的な英語教育を期待します。

Q：パソコンはどうしたらよいのですか。

A：パソコン基礎、ワード基礎、エクセル基礎は、貧困か否かに関係なく、すべての児童・生徒が学校を卒業する月の最後の日までをかけ、確実に身に着けさせてください。今、教えているパソコンはこの子にはこの先、私以外に教える先生がいない。このくらいの気構えで教えて頂きたい。

Q：社会に出た人で、英語やパソコンをはじめ学校で身に着けるべき知識や技能が身に着いていない人にはどうしたらよいのですか。

A：(1)夜間中学校、夜間高校、土日の補習校、単位制高校やコミュニティ・カレッジ(大学公開講座)などの活用を、貧困・機会の格差是正政策として日本国中で奨励すべきです。

(2)パソコンと英語は、子どもだけでなく、身に着いていない全国民には、学校を用いて無料で教えるべきです。

(3)日本に来た外国人で日本語を学びたい人には、全員に無料で日本語を教える仕組みを全国各地の学校につくるべきです。

Q：貧困撲滅のために国が行うべきことは他にありますか。

A：あります。山ほどあります。

(1)例えば、来年、2017年4月に消費税を8%から10%に増税するのであれば、その増税分は子どもや若者、失業者の貧困・機会の格差是正に、まずはあてるべきです。

(2)イギリスやフランス、オランダなどに習い、所得税が一定額(控除額)に満たない納税者に、その差額分を逆に給付する「給付つき税額控除」の制度を導入し、働いた分だけ所得が増えるようにすべきです。働いて自分の力で稼ぐことを大切にする税制が大事。

Q：学習塾・予備校・私立学校の経営幹部の皆様にお伝えしたいことはありますか。

A：(1)学習塾・予備校・私立学校こそ政府や自治体の要請により子どもの貧困・機会の格差是正の中心的な機関として活動すべきと考えます。

(2)自分たちにできることを書き出し、どんどん実行に移して頂きたく思います。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月もお読みになれば必ずお役に立つ本を紹介いたします。

(1)1冊目は、竹中平蔵著「大変化、経済学が教える2020年の日本と世界」PHP新書、PHP研究所2016年1月5日刊です。日本国が取り組むべき論点如山盛りで、必ず参考になります。小泉内閣・安倍内閣の経済財政政策をつくり続ける竹中氏の本書を丁寧に読めば、自分たちがやるべきことが明確になります。

(2)2 冊目は、世阿弥著・小西甚一編訳「風姿花伝・花鏡」たちばな教養文庫、たちばな出版 2012 年 3 月 1 日刊です。小西先生は私も愛読している名著、「古文の読解」「古文研究法」「基本古語辞典」などでおなじみの古文の大家。その小西先生のわかりやすいことこの上ない現代語訳を何回も読んでから、世阿弥の原文を何回かゆっくりと音読すると、世阿弥の芸術論をじっくりと味わうことができます。日本のリーダーたちが世界の古典を読み込んでいるように、日本に興味をもつ外国人の多くは世阿弥をかなり読み込んでいます。グローバルに活躍することを目指す日本人にとって、世阿弥の芸術論はじめ、代表的な日本の古典の全文読破は必須です。

(3)3 冊目は、アラン・グリーンスパン著、斎藤聖美訳「リスク、人間の本性、経済予測の未来」日本経済新聞社出版 2015 年 9 月 17 日刊です。「合理性がなければ、経済の生産性は向上しない。だが、アニマルスピリットも経済に影響を与える」。FRB 議長を 10 年つとめたグリーンスパン氏の興味が尽きない経済論。慶應義塾大学の同級生である斎藤女史の訳も極めて丁寧でわかりやすい。

(4)4 冊目は、斎藤孝著「語彙力こそが教養である」角川新書、KADOKAWA、2015 年 12 月 10 日刊です。この本を読み終え、明治大学教授の斎藤先生の著書は、東京工業大学教授の池上彰先生の著書と同様に、全冊読んだほうがよいような気がしてきました。

是非、御一読ください。

— 2016 年 1 月 7 日記 —